



## 古代ギリシアの死生観



(イリッソス河畔出土の墓石、  
アテネ国立考古学博物館蔵)

吉武 純夫 (西洋古典学)

私は西洋古典学を教えています。私自身の研究の中心にあるのはギリシア悲劇、古代ギリシアの死生観、戦没者追悼演説です。ここでは、この中から彼らの死生観について述べてみようと思います。

ソクラテスが人の生には良し悪しがあるといい、よく生きることを何よりも勧めたということはよく知られていますが、古代のギリシア人はまた、どういう死がよい死かということも考えました。今日の私たちにとって、どんな死にかたが一番いいかということ、何事もなく死ぬということが一番に思い浮かぶでしょう。太平洋戦争時の日本なら、お国のために死ぬこともよしとされていました。古代ギリシアにもそれらと同じ感覚はありましたが、それとはかなり違った感覚もありました。話が複雑になるので詳しくは述べられませんが、何事かに命をかけそれで死ぬなら本望、というような死にかたを特によしとする感覚がありました。そのような切羽詰った

状況は日常のなかには殆どありませんが、神話や悲劇がそういう例も多数作り出しています。彼らはそのような話を通して、個々人が命をかけて取り組むべきことは何かということ自問してみる機会を、たびたび与えられていたのだと言えます。

死生観でもうひとつ興味深いのは、『オデュッセイア』にある冥界の描写です。主人公は冥界に旅する機会を得ますが、長い航海のすえやっとの思いでたどり着き家族の亡霊の前に立っても、言葉が通じず認識してもらえません。死は人を容赦なく連れ去ってしまうものですが、空間的な遠さに加えて知覚的な遠さをも表現したこの話は、死者たちの徹底的な遠さを巧みに描いたものと言えるでしょう。ここに掲げる墓石のレリーフはそんな考えかたを背景にしたものです。

分野・専門紹介—File3

## 国際的な環境で映像を探求する

分野・専門名：映像学

映像学は、2017年4月の人文学研究科の発足とともに設置された新しい専門分野です。

一口に映像学といっても、さまざまな形態やアプローチがあり、それはそれぞれの大学の方針によって異なります。名古屋大学では、まず、理論的・歴史的に広い見地から映像を捉えることを重視します。映像の生産、流通、上映、表象、受容に関わる多様な側面を、歴史的・社会的・政治的・経済的・文化的・テクノロジー的・エコロジー的文脈を視野に入れながら、実証的・理論的に研究することを大きなビジョンとして掲げています。具体的な研究対象としては、映像批評理論、映画史、各国・地域映画、初期映画、越境映画、インディペンダント映画、映像文化（ジェンダー、エスニシティ、モダニティ、記憶、エコロジーなど）、ジャンル（ドキュメンタリー、アニメーションを含む）、スター、映画祭、観客、メディア産業、検閲、トランスメディア、デジタル映像、映像アーカイヴ、映像教育、テレビ、写真などが挙げられます。

また、東アジアに重点を置いている点も私たちの映像学の特徴です。英語圏の Cinema Studies は、



欧米の映画を中心に発展してきた傾向がありますが、私たちはそれを東アジアの観点から見直すことを一つの大きな目標にしています。ただしもちろん、欧米やその他の地域の映画・映像も扱います。

さらに、私たちの映像学は国際的な環境にあるということも大きな特徴です。授業科目は、日本語だけでなく英語でも教えられています。毎年国際シンポジウムが開かれ、先端的な研究を行っている国内外の研究者と触れ合うことができます。教員は皆、海外での研究・教育経験が豊富であり、留学生もさまざまな国から来ており、院生たちは国際研究集会で積極的に発表しています。

これらの点で、名古屋大学の映像学は他に類を見ない特色があります。学部には映像学専門はありませんが、授業の受講や研究室訪問はいつでも歓迎します。  
(藤木 秀朗・教授)

#### 分野・専門紹介—File4

## 日本語ってなんだろう？

分野・専門名：日本語学

皆さんは「日本語の研究」というと何を思い浮かべるでしょうか。ら抜き言葉や敬語といった言葉遣いなど、「正しい日本語とはなにか」を追究する学問だと想像する人も少なくないのではないのでしょうか。

しかし、「正しい日本語」を突きとめることは不可能です。理由は言葉が変化するというところにあります。平安時代の日本語に目を向けてみると、今の日本語とは姿が大きく異なっており、また明治・大正期の日本語も今の日本語とは異なっています。言葉は時代の流れに応じて絶えず変化しているのです。

このように考えると、日本語を様々な角度から見ることができます。例えば、古代から今に至るまで日本語がどう変化したのかということや、地域によって日本語にどのような違いがあるのかなどです。実は普段使っている日本語であるのに、知っているようで知らないことが山積みです。

私たちは、この日本語という宝の山に目を向け、自分が興味を持った現象をとことん追求していき、「日本語を通じて世界の深みを覗く」、そんな研究室です。

釘貫先生、宮地先生に加え、今年度から斎藤先生も加わり、研究室はよりパワーアップします。さらに院生や留学生も在籍しており、学部生の数も多くにぎやかです。自分が疑問に思ったことを、皆で共有して話し合える、そんな雰囲気のある研究室です。

これまで先輩方をみても、新聞社や教員、公務員や一般企業など様々なステージで活躍されています。日本語教師になりたい、言葉を扱う職に就きたい、そのような思いを持っている方も、持っていない方も、「自分が持つ日本語や方言の面白い研究がしたい」という思いがあれば素質は十分にあります。身近な言葉への興味関心が尽きない人、私たちはそんな方をお待ちしております。

(安藤 翔太・前期課程2年)

#### 最近の文学部

### 新学期が始まって一息...

授業が始まってそろそろ一月。昔と比べて他専門の授業にも積極的に登録する学生さんが目立つようです。今年から倍増した講義題目に目移りしながらも、幅広い知識を求めている今日の名大文学部生たちです。(YK 記)

\*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は...  
名大文学部のWEBサイト <http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/> まで(『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります)